

# 炭焼きの 与助

【その1】

作：近藤せいけん



## 焼き 与助 その1

昔々、江戸時代の頃、相模の国に煤ヶ谷村（すすがやむら）と言う、山間の村がありました。

この煤ヶ谷村は丹沢の深い山に囲まれていて、田んぼや畑は少なく、山の豊かな森林を切り、丸太にして中津川にいかだをくんで流し、運んだり、炭の生産で、生計をたてていました。

この村に、両親、兄弟のいない、天涯孤独（てんがいこどく）の、与助という、若者が住んでおりました。

与助は赤子の時、村のお寺の境内に捨てられていたのを、寺の住職に助けられ、木こりの、老夫婦に、預けられ、育てられた孤児でした。

老夫婦も、与助が十一歳の時に、村を襲った、大雨で、おきた、崖くづれによって、亡くなり、また、一人ぼっちに、なってしまいました。十八歳になった、今日まで。ひとりで、炭焼き小屋で暮らし、小さな畑で、さつま芋、季節の野菜を作り、また、にわ鳥を飼い、毎日、生みたての卵を食べたり、牛の乳を飲んだりして、丈夫に育ちました。

村の人々から、可愛がれ、とりわけ、寺の住職は、わが子のように、可愛がれ、読み、書き、書、学問を教えられ、立派な若者に成長しました。

与助の日課は、木を切り、まきを作り、そして、炭を焼き、畑仕事、に

わ鳥。牛、馬、世話に追われていました。

五日に一回、隣の厚木の宿場町に炭を売りにゆき、忙しい日々を送っていました。

ある日のことです。いつものように、炭を満載し、愛馬、太郎に荷車を引かせて、野菜、さつまいも、うみたての卵、などを載せて、厚木の宿場町に売りにいきました。

炭は、お得意様の大きな商店、旅籠、そして、町家の人々に買ってもらい、新鮮な卵、野菜は料理屋におろし。大半が売れ、その日に限り、野菜、さつまいもが少し、残りりました。

「さあ、太郎や、今日はこの辺で上がろう。暗くならないうちに、早く煤ヶ谷村に帰ろう」

軽くなった荷車を、馬に引かせて、宿場町のはずれの古い、長屋の前を通りすぎようとした、ときのことである。

まだ、幼い、六、七才の男の子、三、四才の女の子が地べたに座っていた。女の子泣きながら、「兄ちゃん、お腹すいたよ。何か食べたいよ」と泣きながら、うたえていた。

「もう、昨日朝から、何も食べていないよ。食べたいよ～お腹すいたよ～」と。

男の子は、力無く、

「もう少し、がまんをし。となりのおじさんが帰ってくれば、何かくれるよ」

「でも、昨日も、今日も帰ってこないよ。早く帰って来ないと、家にいる、おかあちゃんも、死んじゃうよ」

「ここで、待っていな。長屋を回って、食べ物をもたらってくるから」荷車を止めて見ていた、与助はたまらなく、声をかけた。

「坊や、お腹空いているのか。おとう、おかあは、どうした？」

「坊は、この長屋に住んでいるのか？」

「う、んーんーそうだよ。おとうは、坊が小さいうち、死んだ」

「おかあ、病気で寝ているよ」

「そうか・・・」

「ちょうど、お兄ちゃんが、お得意様でもらった、おにぎりが三個ある。  
お食べ、白米のおにぎりだよ」

「えーお兄ちゃん。本当にくれるのか〜」

「本当だ、さあ〜お食べ」

「わあー、白米のおにぎりだ。何年ぶりかな〜」

「でも、おかあーが、知らない人から、もらってはいけない。て、いわれ  
ているから〜」

下の女の子は、すでに、手を出して、「もう、どうしても、食べたいよー  
」と叫んでいる。

「いいよ、お食べ、お兄ちゃんがおかあさんに、話してあげるから、安心  
して、さあ、お食べ」

「わあーうれしい〜」

二人の幼子は、夢中になって、大きなおにぎりをほおばった。

「うめい〜うめいよ〜本当にうめいよ〜」

与助は優しい、眼差しで、幼子を見つめていた。